

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol.5

Miles Davis【マイルス・デイビス】

～常にクールでヒップだったジャズ界の帝王～



写真提供：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル

Profile

1926年5月26日、米イリノイ州アルトンで生まれる。本名はマイルス・デュエイ・デイビス三世。東セントルイスの裕福な家庭で育ち、父親の名前を取って付けられたことから、幼い頃のニックネームは「ジュニア」だったが、マイルスは大嫌いだたと伝えられる。9～10歳の頃にトランペットを吹き始め、13歳の時に父親からトランペットをプレゼントされ、以後も地元でレッスンを積む。やがてツアーでやって来たビリー・エクスタイン楽団のチャーリー・パーカーやディジー・ガレスピー等と共演することでジャズにのめり込み、44年ジュリアード音楽院入学を機にニューヨークに移住。ビ・バップ・ムーブメントの中、46～48年の間バードのバンドで腕を磨いた後、ギル・エバンスと共にクール・ジャズを生み出す（『クールの誕生』）。55年に第一期黄金クインテットを結成し、モード・ジャズを確立（『マイルストーン』『カインド・オブ・ブルー』等）。63～68年の第二期黄金クインテットでアコースティック・ジャズを極め、それ以後はエレクトリック化に移行し、ロックやファンク色の強いサウンドを導入することで、後のフュージョン・サウンドの基盤を確立（『ソー・サラー』『イン・ア・サイレント・ウェイ』等）。1970年にはアルバム『ピッチェズ・プリュー』が年間40万枚のビック・セールスを記録。75～80年に一時演奏活動を休止するが、カムバック後はアルバムを constants に発表し、ラップやヒップ・ホップなどを取り入れ、世界中でライブ演奏を行うなど精力的な活動を続けた。また、ボクシングで体を鍛え、晩年は絵を描くなど芸術の分野でも才能を発揮。1991年9月28日、肺炎、呼吸困難等の合併症により、カリフォルニア州サンタモニカの病院で息を引き取った。享年65歳。

マイルスの原点を知るならこの1枚！



パリ・フェスティヴァル・インターナショナル
マイルス・デビース
(ニュー・ミュージックジャンクション・インターナショナル:
SRCS-9301「廃盤」)

Miles Davis (tp), James Moody (ts),
Tadd Dameron (p), Barney Spieler (b),
Kennedy Clark (ds)

1. Riff tide 2. Good Bait 3. Don't Blame Me 4. Lady Bird
5. Wah-Hoo! 6. Allen's Alley 7. Embraceable You 8. Ornithology
9. All the Things You Are

スライとJBを意識した傑作！



オン・ザ・コーナー
マイルス・デビース
(ニュー・ミュージックジャンクション・インターナショナル:
SICP-845)

Miles Davis (tp), Dave Liebman, Carlos
Garnett (ss, ts), Teo Macero (sax),
John McLaughlin, David Creamer (g),
Herbie Hancock, Chick Corea (key), etc

1. On The Corner 2. New York Girl 3. Thinkin' One Thing And Doin' Another 4. Vote For Miles 5. Black Satin 6. One And One 7. Helen Butte 8. Mr. Freedom X

マイルスがCBSに残した最後の作品



ユア・アンダー・アレスト
マイルス・デビース
(ニュー・ミュージックジャンクション・インターナショナル:
SICP-990)

Miles Davis (tp, vo, synth), Bob Berg
(ss, ts), John McLaughlin, John
Scofield (g), Robert Irving III (synth),
Darryl Jones (b), Al Foster (ds), etc

1. One Phone Call/Street Scenes 2. Human nature 3. MD1 / Something's On Your Mind / MD2 4. Ms. Morrisine 5. Katia Prelude 6. Katia 7. Time After Time 8. You're Under Arrest 9. Jean Pierre / You're Under Arrest / Then Three Were None

マイルス & ビートルズ

「マイルスの最高傑作は？」と問われると悩んでしまうジャズ・ファンは多いだろう。マラソンセッション4部作から挙げるべきか。『カインド・オブ・ブルー』を挙げるべきか。または『ピッチェズ・ブルー』を挙げるのが無難だろうか…。まるでジャズ通としてのセンスの有無を問われているようで、なかなか素直に言い出せない…なんて感じる人も多いのでは。でも、悩むことはない。マイルスの作品をビートルズに置き換えればよい。「ビートルズの最高傑作は？」と問われ、全ての人が『サージェント・ペパーズ〜』を挙げるわけではなく、初期の『ミート・ザ・ビートルズ』を挙げる人もいれば、中期の『ラバー・ソウル』、または『リボルバー』、後期の『ホワイト・アルバム』や『レット・イット・ビー』を挙げる人もるように、素直に好きな作品を挙げればよい。全ての作品がそれぞれに最高で、革新的で、今でも古臭さを感じさせないのだから。そのビートルズとの共通点そなかつたが、マイルスは死の約9ヶ月前の1991年12月22日、東京ドームで行われた『ジョン・レノン追悼コンサート』で来日し、「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」1曲を演奏した。

『クール』の誕生から間もない、1949

年5月8日に行われた「パリ国際ジャズ・フェスティヴァル」での演奏を収めた作品。共に参加していたバードのグループを抜けたばかりで、自己のグループを率いる前の若きマイルスが、タッド・ダメロンと組んだクインテットでパリのビ・パックス魂を披露。マイルスにとって初の海外旅行で、かのジュリエット・グレコと恋に落ちたのもこの時。マイルス本人も人生観を完全に変えられたというパリの最高のひと時を感じさせる生き活きたマイルスがここに居る。フランス人による実況も臨場感を煽り、偉大なる先輩プレイヤー連からの影響を色濃く受けたビ・パックス、マイルスが吹きまくる！

マイルスが若い黒人達をターゲットに

1972年に録音した傑作！当時の音楽シーンで絶大な人気を誇っていたスライ・ストーンとジェームス・ブラウン、マイルスはその音楽的理論に興味を持ったというドイツの前衛作曲家カールハイツ・シュトゥックハウゼンと英国の作曲家ポール・バックスマスターのコンセプトに、オーネット・コールマンから吸収した要素をまとめ上げた作品。「新しいベース・ラインに合わせて、足リズムを取れるような音楽」とマイルスが語る如く、そのサウンドはファンキーでグルーヴィーで真っ黒けっけ！この作品を境にマイルスのバンドは完全に電氣化されていく。特に「ブラック・サテン」が好きだ！

現在R・ストーンズで活躍するベース

のダリル・ジョーンズの紹介によるステイキングの参加(フランス語を喋る警官役としての声の出演のみ)などの話題もあるが、この作品への思い入れは、やはりマイル・ジャクソンの「ヒューマン・ネイチャー」とシンデラー・ローバの「タイム・アフター・タイム」の2曲。この当時大ヒットしていたポップスを「現在のスタンダード」として取り上げ、美しいシンセサイザーや絶妙なタッチでリズムを刻むギターの音色と共に、最高のメロディを奏でるマイルス。晩年のライブでも好んで演奏され、満員の会場を盛り上げていたのも印象深い。録音は1984~1985年にかけて計5回行われた。

マイルス・デビース自叙伝

この「The Walker」でも度々引用させてもらっているマイルス・デビース クインシー・トループ著 中山康樹訳『マイルス・デビース自叙伝 I & II』(宝島社文庫)。ドラッグや女性関係の赤裸裸度も高いが、気難しいイメージとは裏腹に、かなりまっとうな人間だったことも窺い知れる。マイルスを知るには最適！未読の方は是非一読を。

マイルスとベースマン達

マイルスが率いた第一期黄金クインテットのポール・チェンバースと第二期のロン・カーターは有名だが、それ以前にもバシー・ヒースやオスカー・ペティフォード。仲違いもしたチャールズ・ミンガスにバンドのバンドにいたトニー・ポッターなども忘れ難い。また、若きマイルスが地元セントルイスでオーディションを受け雇われたバンド「ブルー・デビルズ」には、エリントンに引き抜かれる前のモダン・ベースの開拓者ジミー・フランソワが在籍していた。そして、エレクティック化へ移行する過程で活躍したティブ・ホンディに、完全エレクティック化後のマイルル・ヘンダーソン。マイルスが全信頼を置いたマーカス・ミラー。現在はストーンズで活躍するダリル・ジョーンズなど、マイルスの作品をベースマンから聴き比べてみるのも面白い。